

# 「ルラクサシオン」に基づくオンド・マルトノ奏法の研究——身体論と電子楽器奏法の関わり——

大矢素子

本稿では、フランスの新楽器開発者モリス・マルトノ Maurice Martenot (1898-1980) とロシア人チェリストであるユーリ・ビリシチン Youri Bilstein (1888-1947) が共に練り上げた「ルラクサシオン」の観点に基づき、マルトノが著した電子楽器オンド・マルトノ Ondes Martenot の教則本『オンド・ミュージカルの教育メトード』(『メトード』) の奏法記述と身体論の関連性を検証した。まず、ビリシチンの著書、『心理・生理学的音楽教育法第1巻、ルラクサシオン』及び、後にマルトノがビリシチンからの影響を受けて出版した『ルラクサシオン・アクティヴ』に関する先行研究もふまえつつ、鋭敏化された知覚を通じた身体の再認識による人間の総合的成熟を目指す試みとして「ルラクサシオン」を定義づけた。その上で、上記二著を参照しながら、『メトード』の奏法記述と「ルラクサシオン」に見られる身体の運動の関連性を検証し、『メトード』に書かれた奏法の動きのプロセスが、「ルラクサシオン」におけるその具現化とみなし得ることを指摘した。さらに、『メトード』は、「演奏者の全体的洗練」(Martenot 1931, 9) を重視する点において、19世紀末ごろから20世紀前半にかけてヨーロッパで見られた総合的人間理解を目指す身体論的試みと関連している可能性に言及した。